

# 中世における殺生観の展開

原 田 信 男

- 
- |                     |                    |
|---------------------|--------------------|
| 1. 平安期における仏教的殺生観    | 4. 肉食の否定をめぐる新仏教の対応 |
| 2. 殺生禁断令と「屠児」に対する差別 | 5. 関東平野における旧仏教と新仏教 |
| 3. 鎌倉期における肉食禁忌と新仏教  | 6. 神道の対応とその後の展望    |
- 

## 論文要旨

律令国家体制の下で出された肉食禁断令は平安時代まで繰り返し発令され、狩猟・漁撈にマイナスのイメージを与える「殺生観」が形成されるようになる。鎌倉時代に入ると、肉食に対する禁忌も定着してくる。しかし、現実には狩猟・漁撈は広範囲に行われており、肉食も一般的に行われていた。そこで、狩猟・漁撈者や肉食に対する精神的な救済が問題となってくる。仏教や神道の世界でも、民衆に基盤を求めようとするれば、殺生や肉食を許容しなければならなくなった。ところが、室町時代になると、狩猟・漁撈活動が衰退し肉食が衰退していくという現象が見られる。室町時代には、殺生や肉食に対する禁忌意識が、次第に社会に浸透していったように思われる。

一方、農耕のための動物供犠は中世・近世・近代まで続けられていた。肉食のための殺生は禁じられるが、農耕のための殺生は大義名分があるということになる。日本の社会には、狩猟・漁撈には厳しく、農耕には寛容な殺生観が無意識のうちに根付いていたのである。